

■ 書 評 ■

山内乾史 著

『文芸エリートの研究—その社会的構成と高等教育—』

横浜国立大学 渡部 真

(1) 演劇評論家の渡辺保は、歌舞伎芝居の楽屋を初めて訪れた時の印象を次のように記している。「なによりも、私が驚いたのは、舞台裏の女形の姿であった。ついさっきまで観客の前で艶やかに微笑んでいた女形が、私の目の前を歩いていった。彼は女の姿でありながら、太い男の地声、話し方で周囲の者と談笑し、大股に男の歩き方で、私の目の前を通り過ぎていった。そこには女の影など微塵もなく、そばで見るとグロテスクとしかいいようのない化粧と、粗末で、うす汚く、大まかな衣装とがあるだけだった。私はまるで幽霊でも見たように、つよい衝撃を受けて立ちすくんでしまった。そして舞台裏など絶対に見るべきではない、そう思った」(『秀十郎夜話』解説)。

山内乾史氏の新著『文芸エリートの研究』は、文芸家たちの舞台の上での立ちふるまいではなく、その舞台裏や楽屋でのありさまを批判的に明らかにしようとした著作である。原一男監督のドキュメンタリー映画『全身小説家』が、作家、井上光晴の生涯を、その経歴の嘘をも含めて追いかけていったように文芸家たちの舞台裏での姿に迫ろうとしている。渡辺のいう「絶体に見るべきではない物」を「見ようとする者」の記録ともいえる。

もともと、日本のような私小説の伝統

が強い文芸風土では、作家のほうから自らの楽屋での姿を白日のもとにさらし、明らかにし、それを作品化しよう(舞台にのせよう)とする場合がある。だが、その姿は、作家の本当の姿とは必ずしも一致しないのではないか、という問題意識が本書にはあるように思う。より客観的・科学的なデーターが必要というわけである。

本書を、私のような文芸にシンパシーをもつ者の目から見ると、「そこまでやるのか」とか「かしこい頭とクールな心」とかいった言葉が浮かんでくるが、そうした特徴が、また教育社会学的なのかもしれない。

(2) 文芸エリートとは、あまり聞き慣れない用語である。文芸家のなかのエリート層という意味であろうが、本書では、それを「近代文芸エリート」と「現代文芸エリート」に分け、それぞれを操作的に定義している。「近代文芸エリート」を1990年時点で個人全集が刊行されていた458名、「現代文芸エリート」を『文芸年鑑』(1991年)掲載者の中から、『第36版人事興信録』(1991年)に掲載されていた458名であるとする。また、両方に重複してあらわれる者が33名存在する。

山内氏が本書で検証したかった仮説は

2つあるという。1つは、「文芸家は学校（特に高等教育）と無関係にレッス・フェールの過程から供給される」という通説に反論し「文芸家は主として学校（特に高等教育）を通じて発掘・形成されるものであり、したがって、その学歴構成は決してランダムに分布するものではなく、特定地域、特定階層に偏っている」という仮説である。2つ目の仮説は、「学校（特に高等教育）での文芸家の発掘・育成にとって特に重要であるのは、そのフォーマルな側面よりもむしろ、そのインフォーマルな側面、すなわち、子弟関係、先輩—後輩関係、同級生などによってつくられるネットワークである。このネットワークによって、文芸家の才能の発掘・育成がはかられる」というものである。

実際の作業としては、文芸エリートの活動領域別、出身地別、出身階級別、学歴別などの分布や大学卒業率を調べたり、文芸流派別に、作家の初期キャリアのパターン分析を行なっている。そして、次のような知見を得ることができたという。

①近代文芸エリートは、機能的・実質的に特定の高学歴を必要とした。文才に富む非高学歴者の参入を一定範囲で許容しつつも、非常に閉鎖的な世界を構築していた。農漁民階層と労働者階層からは、少なくとも文芸界のトップ・エリートは、ほとんど輩出されなかった。

②現代文芸エリートは、近代の場合より、一層、大都市出身者、特に東京出身者が増加し、出身階層については専門職階層の優位が高まった。学歴についてみ

ると、やはり高学歴で、特に、東京所在の高等教育機関の出身者が圧倒的に多い。

③高等教育機関のフォーマルな側面とインフォーマルな側面を比較すると、インフォーマルな側面が重要であり、特に、文芸サークルや同人雑誌を中心として形成される人脈や学歴を軸として編成される人脈が大きな意味をもった。

結局、当初の2つの仮説は、留保つきながら実証されたことになるという。

(3) 本書は、これまで他の研究者が手をつけてこなかった分野に果敢に挑戦した、オリジナリティーにあふれた研究書である。また、本全体がいくつかの研究論文を合成した形態を取っているが、読者が全体の構成をたどりやすい構造になっている。予想されるさまざまな異論に対しても、あらかじめ反論を用意する周到さである。文章もわかりやすく、「内容は自分本位に、表現は読者本位に」というか「自分にしか言えないことを、だれにでもわかるように書く」（梅田貞夫）という方針が透らぬかれている。

だが、私には、本書に納得できないところがいくつかあった。それは、第1に、明治以降の文芸エリートが883人も選ばれているという点である。日本文学全集の類がこれまで何度も刊行されているが、100人以上の作家を登場させたケースはあまりない。今の日本人に影響を与え続けている文芸家の数はさらに少ないはずである。多くの事例を取ることは、一見、研究の正確さを増すように見えるが、実際は、研究対象の特質を見失わせることになりかねない。本書全体を通じ

て、「文芸エリートといっても、一般社会人とあまり違いのない考え方（例えば、インフォーマルな人間関係や高い学歴取得の重要性の認識）を持って生活している」ということが語られているように思うが、それは、900人近くものサンプルを取ったことで、より一般社会人の特徴に近くなったということではあるまいか。明治以降の代表的文芸家20～30人を取れば、結果もずいぶん違ったものになると思う。いつの時代でもそうだが、文筆だけで生計をたてられる人間はごくわずかである。普通他に職をもったり、親兄弟に寄生したり、女性に食べさせてもらいながら文筆活動を進めていく。そうした状況のもと、900人もの文芸家のなかに、一般社会人の生活知が入りこむのはむしろ当然に思う。

さらに、山内氏の第2の仮説検証については、あまり説得的な説明がなされていないように思った。高等教育での文芸家の発掘・育成について具体的にいわれているのは、人間関係のネットワークということにすぎない。人が「文章を書き」「それを人に見せ」「評価される」。山内氏が問題にしているのは、その「見せ」「評価される」という部分であって、もっとも大切な「ある人がどんな文章を書くのか」という部分ではない。「創作の秘密」は、なんら明らかにされていない。

先輩や同級生のネットワークがあれば、たしかに有利であろうが、「文芸家の才能が発掘・育成される」とまではいえないのではなからうか。文芸の世界は、もっと苛酷なものである。知り合いにできることといったら、持ち込まれた原稿

を読んでアドバイスしたり、雑誌仲間に入れたり、出版社に紹介するぐらいのことであろう。文芸流派はあっても、文芸家の仕事のなかに、共同研究や共同発表のようなものはほとんどない。創作現場では、「どこまでいっても個人」という原則がつらぬかれている。就職先が、親分—子分関係や学閥の強さで決まったりする世界に比べると、ネットワークのもつ意味は大きくない。少なくとも、ある文芸家が文筆だけで生活していけるか否かを分かつ決定的な要因にはならない。それよりは、より広範な一般読者に支持されるか、本を買ってもらえるかが問題である。そして、それを決めるのは書かれた本の内容である。

河上徹太郎の『日本のアウトサイダー』に登場する人物がほとんど全部、文芸家であったことを指摘するまでもなく、日本の代表的な文芸家には、アウトサイダーの匂いがする。本書であきらかにされたように、大学の中途退学者は通説ほど多くなかったのかもしれない。だが、伊藤整の指摘するように、大学卒業後、実業界や官界にすぐ就職した者は少なかった。堅実な会社に就職しようと思えばできたのに、しなかった。就職するにしても零細な出版社に勤めたり、すぐに退職してしまったりする。学校や教師に対しては、さまざまな批判をあげせかけるし、大学での講義内容自体、否定の対象でしかない。なかには、授与された博士号を文部省まで返しに行こうとした人や、現世を呪い、自殺や心中を繰り返し試みた人もいる。そのような「アウトサイダーとしての文芸家」の書く本